

団体名	公益財団法人 兵庫県国際交流協会	多文化共生のまちづくり促進事業	ジャンル	日本語学習
事業名	外国人県民のための「すぐに役立つ日本語」普及推進事業			

事業名 外国人県民のための「すぐに役立つ日本語」普及推進事業

特徴 本人のみでなく家族や支援者も学習内容の振り返りが可能。
地域性を盛り込み学習者が生活で必要としている日本語学習ツールを作成、展開。

事業のポイント

◇生活に必要な日本語に併せて、地域の社会習慣、生活情報を学ぶことを目的に開発した地域性溢れる教材について、活用の幅を広げるべく多言語化を図る。
◇在住外国人の定住化が進む中、日本語学習のニーズも多様化していることから、生活場面で必要な日本語の課題を達成していく支援方法（言語行動達成型）の考え方を、作成した教材を使った研修を通して県内日本語教室に普及。

事業の背景・目的

◇定住化傾向が見込まれる在住外国人が支障なく日常生活を送り、自立して社会に参画することができる日本語教育が求められている。
◇そのため、使用頻度の高い言葉や緊急時の言葉を優先し、安全に日常生活を送るための日本語と社会習慣や生活情報を併せて学ぶことが重要である。生活場面での対処能力を学ぶ「すぐに役立つ日本語」の推進のために、教材の多言語化及び支援方法の普及が必要。

事業の概要

1. 「すぐに役立つ日本語」教材作成

(1) 当協会開発オリジナル日本語テキスト『できる?できた!! 暮らしのほんご』の多言語化

当協会では、在住外国人が安全に安心して日常生活を送るための日本語と社会習慣、生活情報を学ぶオリジナル日本語テキストを開発。英語、中国語翻訳版のみであったが、より多くの学習者が活用しやすいよう、当該事業でベトナム語、スペイン語、ポルトガル語版を作成。当協会HPで公開し、ダウンロードできるようにすると共に、市町国際交流協会、県内日本語教室等150箇所程度に配布。

(2) 日本語学習テキスト付属教材「わたしの生活ノート」作成

学習者自身が実生活で、地域や自身の状況や背景に合わせ、個人記録を作成。生活場面で必要とされる対処力をつけると共に、身につけておくべき備えができる。
<http://www.hyogo-ip.or.jp/jptext/>

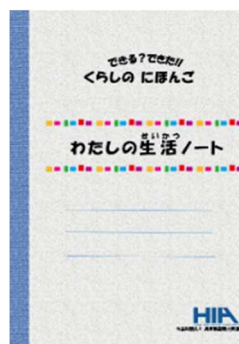
2. 生活に密着した日本語学習支援研修会の開催

日常生活に密着した実用的な日本語を優先的に学び、社会習慣や生活情報を知り、実際に行動してみることで実生活での対処力を培うという支援方法を提案、各地域、学習者に合った活用法を研修。

共催団体（場所）	日時・参加者数
にほんごさーくる淡路 （洲本市）	平成27年10月31日（土） 13:00~16:30/31名参加
豊岡市国際交流協会 （豊岡市）	平成27年11月14日（土） 13:00~16:30/21名参加
三田市国際交流協会 （三田市）	平成28年2月1日（月） 12:30~14:30/22名参加



『できる?できた!! 暮らしのほんご』5言語翻訳



付属教材『わたしの生活ノート』

119番通報、何を聞かれて、どうこたえればいいかをシミュレーション。緊急時にもあわてないよう日本語と母語でメモを作ろう!



事業実施における工夫点・事業の成果等

- ◇『できる?できた!!くらしのにほんご』の多言語化(5言語対応)を図ったことで、より多くの学習者が活用しやすくなった。
- ◇付属教材『わたしの生活ノート』は、切り取り式で、学習者が携帯できる形を採った。例えば119番通報の応答例を母語と日本語でメモし、緊急時に落ち着いて対処できるようそのページを切り取って保管できるように工夫。また、近隣の医療機関情報リスト作成や避難場所までの経路確認、食品のアレルギー表示や市販薬のラベル読み取り等、地域日本語教室で支援者や近隣地域の仲間と共に取組んだ活動成果が、そのまま学習者の実生活で活用できるノート(個人記録)となる。
- ◇研修では、近隣地域も共に参加できるワークショップ形式を採ったことから、それぞれの地域のルールや習慣の違い、支援方法のアイデアを比較、共有でき、地域のつながりができた。
- ◇同じ兵庫県内であっても、様々な地域で研修することによって、地域によって習慣や生活におけるルール、学習者自身の背景や状況によっても必要なことが異なるということが見えてきた。また、同じ防災でも北部地域では、積雪の災害における備えも必須である。現場を知る日本語教室の支援者から意見を聞き取り、地域と共に在住外国人のニーズとそのため支援の可能性を、今後も他地域でも探っていくことで、より柔軟な支援方法や対応が期待される。



活動計画を作成

今後の課題・将来に向けての展望等

- ◇教材を地域日本語教室に配布しただけでは、教科書に基づく支援方法の考え方や具体的な活用法が伝わらず、実際の活用に結びつかないことから、今後よりいっそう県内の幅広い地域で研修会を行っていききたい。
- ◇定住化が進む在住外国人の日本語学習を考える際、文型積み上げ式に加えて、生活場面で必要な言語行動達成を目指す視点を取り入れ、両者のバランスが取れた支援について、考えていく必要がある。
- ◇学習者の中には、地域を移動したり、また複数の日本語教室に通う学習者もいるが、地域日本語教室で連携して支援できる体制づくりも必要になってくるだろう。
- ◇生活場面で必要な日本語を学習者が駆使し、目標を達成するには、さまざま方法が考えられる。在住外国人のための多様なリソースも活用しながら、今後の支援方法の可能性を探る必要がある。
- ◇例えば防災や交通ルール等の学びは、行政と共に取り組みを行うことで、より実践につながり、備えにも役立つことから、今後行政との連携も視野に入れる必要があるだろう。



防災について日ごろの備えを学ぶ

事業担当者のふりかえり

- ⇒ 今回の研修会を通して、現場や地域の意見を聞くことによって、学習者とその地域で暮らすために必要としていること、また学習者個人が必要としている日本語支援が見えてきた。大切なのは、日本語支援の考え方であり、それをどのように形でサポートしていくかである。教科書に縛られることなく、柔軟な支援方法を今後も地域と共に探っていききたい。
- ⇒ 在住外国人が安全に、安心して暮らしていくためには、日本語を覚えることだけではなく、実際にその行為が「できる」ことが大事である。そのためには、行政を含め、地域全体で互いに協力できる体制づくりを築いていく必要があることを再認識した。